

第4章 資料編

1. 運営指導委員会の記録

ア 第1回

出席者：

運営指導委員：加藤 久雄（本日欠席）、北居 明、アダルシュ・シャルマ、正木 寛、
赤沢 早人

学校教育課長：山内 祐司

学校教育課 高校教育第二係：表 恭子

期日：令和2年7月17日（金） 13時15分～ 於 畝傍高等学校 大会議室

（ア）事業進捗状況説明

- ・「課題研究」に関わるこれまでの取り組み
- ① グランドデザイン及びブルーブリックの策定
 - ・指導體制の見直し
 - 育成したい生徒像の明確化、生徒の類型選択を問わない講座編成、実現を期待する生徒像の共有
- ② 職員研修の実施
 - 〈教員〉 定期的な打ち合わせ、課題研究に関する LHR を実施、テーマ調査を実施、課題研究の「ねらい」の共有 → 適切な課題設定、課題に迫る過程の充実
 - 〈生徒〉 1年：「気づきノート」の取り組み、「課題研究へのアプローチ」実施（夏休み）
2年：「研究ノート」への記録、自分の興味・関心を知る、新聞記事の分析、「適切な課題」設定とは何かを学ぶ
- ③ 「課題研究」と「課題研究α」
 - ・第2学年生徒全員が「課題研究」を履修
 - ・アドバンストコース「課題研究」に加えて「課題研究α」を履修
- ④ 課題と展望について
 - ・教員の共通認識、適切な「問い」に関わる研修の実施、具体的な評価方法について
 - ・「課題研究」「課題研究α」との差別化
 - ・「地域との協議」体制強化について

（イ）協議

〈生徒の研究内容について〉

- ・生徒によるレポートで、生徒の気づきが多かった。
- ・客観的なデータから、それに対するいい問いをかけることが大切である。
- ・生徒の振り返りレポートからは熱意が感じられた。

〈課題研究の運営に関わって〉

- ・客観的根拠について筋道を立てる。
 - 自分にとって都合のよい根拠ばかりにならないよう注意する。
- ・きちんと事実に基づいて研究を進める。
- ・本校の課題研究がどちらかといえばアカデミックなものだが、必ずしもそうではない。
 - 日常の中にある課題を生徒たちが考えていく（エビデンスがない場合もある）。
- ・将来的に生徒たちが課題研究とどのように関わってもらいたいかを教員間で共有すべき。

→限られた時間・空間だけでなく、いつでもどこでも課題について考えることができる生徒の育成が大切。

- ・新型コロナウイルスをきっかけに、課題研究の新たなアプローチを
→その課題研究に関わっている人たちにオンラインを通じて話を聞くなど。
⇒授業時間外でも課題研究に取り組める
- ・何もデータがないところから、周りにあるものをかき集めて手法を探る場合もある。
- ・課題研究ではたくさん失敗してよいのではないか。
→生徒自身がやってみたいと思う、必要性を感じているテーマ設定が大事である

〈交流・発信について〉

- ・オンラインを通じてインターナショナルスクールの生徒などと交流できたらよい。
→学生たちの力だけでは難しいため、教員がつながりをもって。
- ・英語で自分の思いを話すことの難しさがある。

イ 第2回

出席者：

運営指導委員：加藤 久雄、アダルシュ・シャルマ、正木 寛、赤沢 早人、
学校教育課 高校教育第二係長：新子 泰夫
高校教育第二係指導主事：川崎 崇

期日：令和3年2月5日（金） 14時15分～ 於 畝傍高等学校 小会議室

(ア) 事業進捗状況説明

①「課題研究」についての説明

- ・新型コロナウイルス感染症の拡大による事業計画の変更
→今年度は研究手法についての理解と課題設定に至るプロセスを重視して、2月の中間発表をまとめとする
- ・ループリックの策定、職員研修、授業担当者会議の実施などによってねらいを共有する
- ・中間発表のねらい
→ポスター発表の方法で探究過程を振り返り、これからの展望に活かす

②「課題研究」中間発表の視察

③「課題研究」の取組状況、および成果と課題について説明

- ・成果→年間計画、ループリックによる指導手順の敷設
生徒、教員間での目標の共有
自然科学分野の課題研究の充実
生徒の主体的なテーマ選択、および研究課題設定
- ・課題→教員間での「伴走者」としての認識の差
担当者、担当時間に限定された取り組み

④「課題研究α」の取組について説明

- ・目標→課題研究の深化、グローバルな視野とローカルな視点、工夫して学ぶ姿勢
- ・活動状況→原則週1回、各自の研究課題について意見交換など
コンソーシアム各機関、地域人材の方々との連携

各種外部コンテストへの参加

⑤事業最終年度に向けて

- ・「課題研究」に関わる校内体制の強化、地域との協働、「自走」に向けて

(イ) 協議

〈課題研究の位置づけ〉

- ・学習指導要領において設定された探究のプロセスをきちんと実行できている。
- ・持続可能な社会をつくる、主体的な学びへ向かう人材をつくることを
- ・地球規模で課題を設定して、行動は自分の足元から考える生徒の育成
⇒地域人材を含め、いろんな人の話を聞くことが課題研究の深化につながる
- ・論理的な思考のためには基本的な事項の学習は必要不可欠である

〈課題研究の運営に関わって〉

- ・研究ノートを介した課題研究の進行がとても良い
- ・教員はファシリテーターに徹すべき（なかなか課題が設定できない生徒への働きかけについても同様）。
- ・受け身ではなく、自分から学びを探す姿勢はよく身についている。
- ・研究動機、仮説への根拠が説明不十分であったところが残念であった。

〈テーマ設定について〉

- ・教員と生徒の議論がよく重ねられており、テーマ設定がとても良い。
- ・課題研究と各教科の授業をどう接続するのか考えるべきである。
⇒教科書の記述から課題研究につながるテーマを発見することも可能なのではないか。
- ・研究テーマを地域とどう繋げるのか検討が必要である。
- ・地域に住む外国人とこれからどう関わっていくのか（共存の時代）を生徒と一緒に考える必要がある。

〈地域との協働について〉

- ・生徒が設定したテーマをこの先ローカル、グローバルにどう発展させるのか、どんな働きかけができるのか、検討してはどうか。
- ・出発点は生徒自らの興味関心で良い。設定した課題をどのように地域、世界につなげていくのか検討してはどうか。
- ・地域のためのセンターとしての役割がこれからの高等学校に求められる。課題研究を地域にどのようにフィードバックしていくかを考えてはどうか。